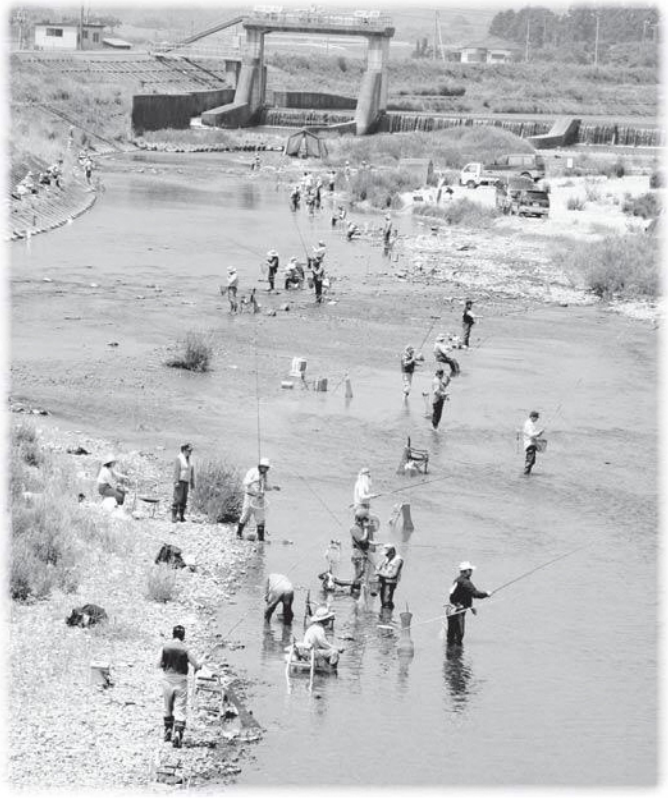

浪江のこころ通信

・第97号・

平成23年３月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年３月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のこころプロジェクト” は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信（※1）」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム（※2）が中心となり、全国各地のＮＰＯ、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

※１ 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話しした「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ってまとめた原稿をほぼ原文のままで掲載しています。

※２ 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、ＮＰＯ、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第97号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979－1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7番地の2
「浪江のこころ通信」宛て
FAX.0240（34）4593

渡部　恵子さん（北幾世橋）・吉田　亀雄さん（樋渡）

取材者：ＮＰＯ法人つなぎ te おおむた　彌永
取材日：３月14日

故郷を離れても続くご縁、新しい土地で生まれたご縁。どちらも宝物だよ

▲右から、渡部さん、下川さん、吉田さん

渡部さん夫妻と吉田さんは、震災前の浪江町に住んでいた頃から、仕事仲間という関係を超えた付き合いを続けておられます。今回は、渡部さんの自宅に吉田さんが足を運ぶタイミングで話を伺いました。

また、取材中に遊びに来られた、近所に住んでいる下川さんにも話の輪に入ってもらいました。

◆浪江町にいた頃から気心の知れた付き合い

吉田さん　私は、洋行さん（渡部さんの夫）の会社で一緒に働いていたんだよ。そのときからずっと気心の知れたお付き合いをさせてもらっているんだ。渡部さんの家は広くて、洋行さんも恵子さんもこんな感じで、気さくっていうかさ。私だけじゃなくて、いろんな人が集まっていたよね。

渡部さん　家の離れには、車が20台とめられるの。だから会社関係の人や家族の方に「遠慮なくどうぞどうぞ」って声を掛けて、最高で40人集まったよ。料理の得意な亀ちゃん（吉田さん）に手伝ってもらって、皆さんに料理をふるまっていたのよ。それを大変なんて思ったことは一度もないよ。準備すること自体が楽しかったんだよね。

吉田さん　浪江では、高瀬川で釣ったイワナやアユも食べていたよね。浜通りには湾がないから、ホタテやカキは宮城県まで買いに行っていた。恵子さんは本当に料理が上手な人で、モクズガニで作る味噌（みそ）やカボチャ饅頭（まんじゅう）なんかも、そりゃ旨（うま）いんだよ。あれは作る人で味も柔らかさも違う。一軒一軒に伝わる味だね。

渡部さん　私は作るのも好きだけど食べるのも好きだから、たいても倒れないように見えるでしょう。でも実は体が弱くてね。入院もしていたんだけど、そのときに、ご飯から何から亀ちゃんに世話してもらったの。

吉田さん　いやいや、そんなオーバーな。やれる範囲のことだけだし、当たり前だからさ。

◆震災後の町や人とのつながり

渡部さん　震災が起きたときは、「まず逃げろ」という状況だったから、みんなバラバラになった。私たちも最初は連絡が取れなくてね。ようやく落ち着いてきて、お互い行ったり来たりしているうちに、うちのお父さん（洋行さん）と私と亀ちゃんの三人で岐阜に住もうかって話で盛り上がったのよ。

吉田さん　だけど、岐阜は雪が積もるからってことで、やっぱりやめてね。浪江は雪があまり降らないから。年に数回、多くても20センチメートルくらいかな。そうそう、冬になると「マリンパークなみえ」のパークゴルフ場に、北海道から観光バスでお客さんが来ていたよ。ロングホールは１００メートル以上あるし、松林もあるし。いい所だったんだ。私の仕事仲間が郡山にいるんだけど、今でも年に一回は、日山（天王山）や須賀川に行って、一緒にパークゴルフをやっているよ。

渡部さん　浪江の思い出は山ほどあるんだけど、うちは家を解体しちゃったから、浪江に帰っても泊まる自分の家がない。解体後に2回、草刈りをしたんだけど、大変だよ。

吉田さん　震災後５年目までは、町に帰って借りていたアパートの掃除や片づけをやっていたよ。家の中全部に思い出があったからね。だけど、ネズミに何もかも破壊されたの…。

渡部さん　３月11日が近くなると、あまりテレビは見ないんだけど、たまたまつけていたら幾世橋に住んでいる方の懐かしい姿が映っていたのよ。すごくおいしい野菜をもらった思い出があってね。テレビを通してだけど、顔を見られて嬉しかった。

吉田さん　実は、つい先日まで岐阜で入院していたんだけど、そこに突然、渡部さんの家族が７人そろってお見舞いに来てくれたんだよ。洋行さんは車椅子に乗っていて、自分自身が体が不自由なのに私を励ましに来てくれたんだ。「サプライズ！」本当に驚いたし嬉しいし、言葉が出なかったね。それで今回は、私が洋行さんの顔を見に行こうと思って。

渡部さん　お父さん（洋行さん）は足が悪くなってから、寝ていることも増えてね。今日は隣の部屋で寝ているけど、きっとこの会話は聞こえていて、楽しんでいると思うよ。

◆避難先での生活

下川さん　私は洋行さんとは、釣りの話題を通じての知り合いなんです。あの方は必ず自分から帽子を取り、挨拶をされる方でしたよ。

渡部さん　そうなの。下川さんは「釣りのお師匠」さん。お父さんが釣りをできなくなっても、こうして遊びに来てくれるから、嬉しいし心強い。

下川さん　最初は遠慮がちに挨拶を交わす程度でしたけど、自然と会話をするようになってね。春が来て暖かくなったら足腰も調子が良くなるかもしれない。そうしたら、また一緒に釣りを楽しみたいと思っているんです。まあ、釣りはできなくても、こうしてしょっちゅうお邪魔していますけどね。

渡部さん　浪江では畑に行くのにも鍵を閉めないし、地域の中では、誰もが顔を見れば「お茶、飲んでいけ～」ってね。だから広島に来てからも、いつも玄関を開けて、誰でも寄っていけるようにしてんの。でも、ここではいつも人が来ているってわけではないから、１人のときは刺繍（ししゅう）をして楽しんでいるよ。

下川さん　こういう人間関係づくり、地域づくりって大切だけれど、なかなかできないことでもあるんですよね。

渡部さん　人のつながりってことでは、広島で水害が起きたときに、「なみえ焼そば」を作りに、わざわざ福島から広島へ来てくれたの。嬉しかったよ。それで私も、「自分が住んでいる広島の人たちに何かできないかな」って考えて、袋入りの「なみえ焼そば」を注文したの。そして地元の行政と相談して、自宅避難の方に配布したんだよ。福島の人間として、恩返しの気持ちだね。

◆震災を体験して思うこと

下川さん　福島で大変な思いをされた渡部さんから、私たちは学ぶことがたくさんあると思うんですよ。

渡部さん　故郷の家に住めなくなって、気軽に帰ることもできなくなった私たちの気持ちって、世の中の人は分かっているのかな。辛いのは私たちだけでたくさん。二度とこんなことは起きちゃいけないし、ちゃんと訓練もしなきゃだめだよ。そのために、まずは隣近所、誰もが顔なじみになって声を掛けあってないとね。

▲渡部さんお手製の刺繍作品

取材を受けていただける方を募集しています

「浪江のこころ通信」は、町民の皆さまや震災前にふるさとを離れた方、町と関わりがある方が抱く浪江町への思いや暮らしぶりを発信し、浪江町への思いを共有するために、平成23年７月の広報紙再開に合わせ、これにとじ込む方法によって発行しています。これまで約440人（家族・グループ・ゆかりの人）の方が紙面に登場し、ご自身の思いを皆さまと共有していただいています。

今回、「浪江のこころ通信」によって、より多くの「思い」を共有し、より良いものとするため、取材を受けていただける方を募集します。

一人でも多くの皆さまの思いをお聞かせください。

※「浪江のこころ通信」は、町ホームページでもご覧いただけます。

URL https://www.town.namie.fukushima.jp/site/kouhou/kokoro-tsushin.html

申・問 浪江のこころプロジェクト事務局
（浪江町役場企画財政課情報統計係）
TEL 0240(34)0241　FAX 0240(34)4593
e namie12030@town.namie.lg.jp